

vivo

3 MARCH 2006

CONTENTS

びわ湖ホール声楽アンサンブル	1
ヴォルフガング・ツェーラー オルガン・リサイタル	2
合唱セミナー& WOOD MUSIC	3
SELF PORTRAIT 兼氏規雄&泉リリコ	4
最近の公演から	5,6
ネタマ&プチ情報	7
インフォメーション	8



写真上;びわ湖ホール声楽アンサンブル

写真下・左から;ヴォルフガング・ツェーラー、合唱セミナー、加藤訓子

東日本初登場の“声のアンサンブル”

3 / 12(日) びわ湖ホール声楽アンサンブル[企画・構成・指揮:若杉弘]

滋賀県大津市。電車を降り、駅からしばらく真っすぐに歩いていくと、目の前には、対岸など到底見えない日本最大の湖、琵琶湖が広がっています。そのキラキラと輝く湖面を眺めてほたりを行けば、美しく開放感溢れる大きな建物が見えてきます。そこが、滋賀県立芸術劇場「びわ湖ホール」。大・中・小3つのホールを持ち、ロビーからは壮大な琵琶湖が一望できてしまいます。そして、ご自慢はこれだけではありません。公共ホールとしては日本で初めての専属声楽家集団を有しています。それが、びわ湖ホール声楽アンサンブルなのです。

びわ湖ホール声楽アンサンブルは、ソプラノ・アルト・テノール・バス、各パート4名ずつの小編成。メンバーは、日本全国から集まった優れた声楽家の中からオーディションによって選ばれた、ソリストとしての実力を持つ16名なのです。ソリスト同士のアンサンブルは個々がぶつかり合ってしまうて難しいのでは? と思いがちかもしれませんが、心配はご無用。彼らの歌声は、“アンサンブル”になってもその魅力を失うことはありません。彼らは、ソロの作品はソリストとして、アンサンブルの作品はアンサンブルの一員として、唱法を変え見事に歌い上げるのですから。

このびわ湖ホール声楽アンサンブルを、「いま最も魅力的な声楽集団」と太鼓判を押すのは、「びわ湖ホール」の芸術監督でもあり、水戸芸術館音楽部門企画運営顧問を務める若杉弘氏です。

指揮者・若杉弘

マエストロ若杉と言えば、ドレスデン国立歌劇場やバイエルン国立歌劇場などのオペラ劇場のほか、ケルン放送交響楽団やNHK交響楽団などのオーケストラの指揮を務めてきた、日本を代表

する指揮者であることはご存知の通り。2005年7月からは新国立劇場オペラ芸術参与に就任されました。水戸室内管弦楽団でも第3回(1990年)、第26回(96年)、第30回(97年)、第52回(02年)の定期演奏会を指揮し、その解釈はもちろん、お洒落なプログラミングで会場を沸かせたことはご記憶に新しいのではないのでしょうか。

そんなマエストロ若杉が、“声”を指揮する、となったら期待は膨らみませんか? 水戸芸術館では、01年「中田喜直 合唱の午後」で、マエストロ若杉が茨城県内の合唱団を指揮し、素晴らしい歌声を導き出してくれました。そして、今春、マエストロ若杉が、再び“声”の指揮者として芸術館に登場します!! しかも、自らが監修を務めるびわ湖ホール声楽アンサンブルを引き連れて。きっと、素敵な歌の心のメッセージを届けてくれるに違いありません。

プログラムもルネサンスから20世紀フランス・ドイツの作品まで幅広く、盛り沢山の内容です。若杉氏の企画・構成ならではの素敵な仕掛けが隠されているはず! 中でもご注目いただきたいのは、びわ湖ホール声楽アンサンブルの演奏会には必ず組み込まれているという、日本の作品。今回は、三善晃さんと松村禎三さんの作品が取り上げられました。アンコールには、あの日本人作曲家の“うた”もご用意してくださっているようですよ。

そして、なんと! 今回の芸術館での演奏会は、びわ湖ホール声楽アンサンブルの東日本初公演となります。岡本佐紀子さん(ピアノ)と左成洋子さん(ピアノ/オルガン)の名演も、アンサンブルにより彩りを加えてくれることでしょう。贅沢な出演者による、贅沢な“声のアンサンブル”を、どうかお聴き逃しなさい! 《馬場》

8年前にふと手にした募集要項。へえ、滋賀県の津にびわ湖ホールができるのか。え、声楽アンサンブル? お給料がでるのか、各パート4名ずつ。よく分からないけど受けてみよう。大々的なオーディションを経て、1998年3月日本初の公共ホール専属声楽家集団びわ湖ホール声楽アンサンブルが誕生しました。イタリアオペラを得意とする者、ドイツリートや宗教曲を得意とする者、新卒だったりすでに活躍していたりと、年齢も経験も出身地もバラバラであった私達は、年に4回の定期公演、年に2演目上演する「青少年オペラ劇場」のソリスト、びわ湖ホールプロデュースオペラの合唱、滋賀県内の小学校での巡回公演や音楽の授業、オペラ普及のために名作オペラをわかりやすくしたびわ湖ホールオリジナル版オペラの各地での公演、依頼を受けての公演、ホールの自主公演等をこなすうちに、今ではすっかり多岐にわたる音楽に挑める座付きならでの声楽家集団となりました。

今回は私達の監修者でもある若杉弘芸術監督がじっくり選んだ曲。日本の作品をはじめ、ルネサンス、ドイツロマン・新ウィーン楽派、フランス印象主義の名曲と共に、この水戸芸術館で東日本デビューの演奏会をさせていただけることになり、メンバー一同大変張り切っています。どうぞご期待ください。

そしてまた、私達の本拠地、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールにもぜひお越しください。

びわ湖ホール声楽アンサンブル
コンサートミストレス 上田祥子

1991年 W.ツェラー
オルガン・リサイタルより



北ドイツ・オルガン楽派の魂を受け継ぐ、天賦の才をもつオルガニスト 3 / 20(月)ヴォルフガング・ツェラー オルガン・リサイタル

ヴォルフガング・ツェラーは、世界中の聴衆から大きな賞賛を受けるばかりでなく、オルガニストを志す多くの若者たちがこの人に学びたいと熱望し集まってくる、まさに現代を代表するオルガニストです。

パッサウ出身の天才オルガニスト

ツェラーは、バイエルン州のパッサウという町で1961年に生まれました。パッサウはドイツの南東に位置し、ドイツ、オーストリア、チェコの3カ国が接近する国境の町です。また、ドナウ川、イン川、イルツ川の3つの川が合流する町でもあります。739年にはすでにハンガリーまで続くドイツ最大の司教区が形成されていたそうです。パッサウの旧市街の中心には、世界最大級と言われるパイオルガンを持つ聖シュテファン大聖堂があります。ツェラーが最初のオルガンの手ほどきを受けたのは、この大聖堂のオルガニストであるヴァルター・シュスターでした。パッサウの伝統と環境が、オルガニスト・ツェラーを誕生させたと言えそうです。パッサウでの研鑽の後、ツェラーは1980年に、ウィーン国立音楽大学に入学。卒業後はアムステルダムのスウェーリンク音楽院、シュトゥットガルト国立音楽大学で、オルガン、チェンバロ、教会音楽などを学びます。ツェラーがいかに若くして才能溢れる音楽家であったかは、学生生活を終えるとすぐに、様々な大学から今度は教員として迎え入れられていることから窺い知ることができます。87年から89年まで、ウィーン国立音楽大学でチェンバロと通奏低音の授業を受け持ちます。87年から88年には、シュトゥットガルト国立音楽大学でオルガンを教えました。そして、89年には、まだ20代の若さにもかかわらず、北ドイツ・オルガン楽派の中心地であったハンブルクの国立音楽大学のオルガン科の教授に任命され、今日に至ります。また、オランダのフロニンゲン音楽大学でも教鞭を執っています。

14年ぶりの再会

水戸芸術館では、開館の翌年である1991年12月23日にツェラーを招いて「バッハ クリスマス音楽の夕べ」と題するオール・バッハ・プログラムによるオルガン演奏会を開催しています。曲目はクリスマス歌によるカノン風変奏曲「高き天よりわれ来れり」BWV769、前奏曲とフーガ 八長調 BWV547 など、J.S.バッハの複雑で精緻な音

の建造物とも呼べる名作の数々。ツェラーは、あらゆる細部にまで注意を払いながら、限り無く荘厳でニュアンスに富んだ美しい演奏を披露してくれました。この時のツェラーは弱冠30歳。それからおよそ14年の歳月を経て、私たちは若き天才のその後の成熟された演奏に立ち会うことになるのです。

北ドイツ・オルガン楽派の継承者

今回ツェラーが選んだ演奏曲は、アランの作品を除いて、すべてが、ツェラーと祖国を同じくするドイツの作曲家たちの作品で占められています。とりわけ、今日ツェラーが活動の拠点としているハンブルクは、17世紀の後半頃から、オルガン音楽の発展に大きな役割を果たした北ドイツ・オルガン楽派の中心地であり、今回の演奏会では、その主要な作曲家たちの作品が取り上げられることとなります。

北ドイツ・オルガン音楽の源泉は、16世紀後半のイギリスおよびネーデルランドの音楽の中にあります。とりわけネーデルランドの中心都市アムステルダムのオルガニスト、作曲家のスウェーリンクは、教育者としても多大な影響力を発揮し、数世代におよぶ北ドイツのオルガニストたちの礎となりました。スウェーリンクはハンブルク出身の2人のオルガニストを世に送ったことで「ハンブルクのオルガニスト作り」という異名が与えられています。その2人とはブレトリーウスとシャイデマン。彼らによってスウェーリンク楽派は継承、発展させられました。その後の三十年戦争による混乱と停滞の時期を経て、北ドイツ・オルガン楽派は、17世紀後半から盛期を迎えます。その代表的な存在として、シャイデマン、トゥンダー、ヴェックマン、ラインケン、ブクステフーデ、リュベック、ベーム、ブルーンズなどがいます。今回の演奏会ではこれらの作曲家のうち、ヴェックマン、リュベック、ブルーンズの作品が紹介されます。カルヴァン派を奉じるネーデルランドにおいては、オルガン音楽は礼拝の前後に位置を占めており、オルガンに特別な課題が与えられていなかったことから、オルガン音楽は限定的な音楽様式・形式をもつものに過ぎませんでした。事実、スウェーリンクは、イギリスやイタリアの影響を受けたトッカータとイギリスの伝統を受け継ぐファンタジー(幻想曲)がオルガン曲の創作の中心でした。それに対して、北ドイ

ツ・オルガン楽派の作曲家たちは、オルガン音楽の多彩な花を次々と咲かせていきました。その幾つかをご紹介しますと、モテットの器楽編曲(インタヴォラトゥーラ)はもちろんのこと、トッカータ、カンツォーナ、パルティータ、パッサカリア、チャコーナ(シャコンヌ)、コラール前奏曲、そして今回演奏される曲種である、コラール変奏曲(ヴェックマン: たたえられよ、イエス・キリスト)、コラール・ファンタジー(リュベック: 我は汝に呼びかけん、主イエス・キリストよ)などを挙げるができます。実は、今回ツェラーが選んだすべての曲、バッハ以降の曲も含めてすべてが、スウェーリンク楽派～北ドイツ・オルガン楽派に根を持つ音楽形式の作品なのです。

バッハ、そして近代オルガン曲

今回演奏される北ドイツ・オルガン楽派以外の作品を簡単にご紹介します。北ドイツ・オルガン楽派の巨匠たちの音楽とパッヘルベルなど南ドイツ楽派の音楽などが合流し、オルガン音楽の金字塔を打ち建てたのがJ.S.バッハ。今回はバッハ作品から 幻想曲 BWV572 と先のヴェックマン作品と同じコラール(プロテスタント教会の賛美歌)の編曲作品であるコラール前奏曲 たたえられよ、イエス・キリスト BWV722 が演奏されます。

バッハがあまりに偉大であった為か、その後オルガン音楽の系譜は長い間停滞してしまいます。こうした空白の時期を経て、近代に至り、オルガン音楽が再び息を吹き返します。近代オルガン音楽は、楽器の発達とも連動して、まさにコスミックとも言える多彩な音色を駆使し始めたのです。今回はドイツの巨匠レーガールのモノローグ 作品63 と近代オルガン音楽の中心地フランスの作曲家アランの 幻想曲 第1番、幻想曲 第2番 が取り上げられます。

さらに、バッハとレーガールとの間の空白を埋めるべく、モーツァルトが自動オルガンのために書いた小品 アダージョとアレグロ K.594 が配置されています。

今回の演奏会でツェラーは、バッハ、そして北ドイツの先人たちが弾いたであろう伝統的なオルガンの音色を、彼らの魂とともに、水戸のオルガンで再現してくれることでしょう。天賦の才を持つオルガニストの「今」を聴きに、どうぞご来場ください。 《中村》



写真左から;畑中良輔、加藤訓子

畑中良輔氏の指揮で歌える貴重なセミナー。課題曲はブラームス 運命の歌。

3月5日(日)合唱セミナー2006 講師:畑中良輔

茨城県合唱連盟、茨城県高等学校教育研究会音楽部との共催により毎年実施している「合唱セミナー」。今回の講師を務めるのは、水戸芸術館音楽部門芸術総監督として皆様にもおなじみの日本音楽界の重鎮・畑中良輔氏です。当セミナーには1998年に続き、2回目の登場となります。

水のいのちの感動が再び

前回は、高田三郎の「水のいのち」が取り上げられました。そのときの熱い感動をご記憶の方も多いことでしょう。水の優しさや厳しさとともに、空から降って海に注ぎ、また空に帰っていくという水の循環性を歌った「水のいのち」に、畑中氏は現代の環境汚染を危惧し、それをどうにかしたいという告発と願いを持ち込んだのです。

『やさしくふりしきり、空から地上にいのちの水をそそいだ時代はどこへ? 母なる海から立ち昇り、また空へ還っていく水はどこへ? この「水の輪廻」をいまという時代にもういちどわれわれは問いか

けよう。科学的に浄化された水に「水のいのち」は、ない』

この作品に注がれた畑中氏の社会的な視点に、会場は一瞬唖然となり、その後、熱烈な共感の歌声に包まれたのでした。

「あの感動をもう一度!」との合唱愛好家の方々からの声に応え、8年ぶりに登場する畑中氏が選んだ作品は、ブラームスの「運命の歌」作品54。いったいどのような作品なのでしょう。

ブラームス 運命の歌

「運命の歌」は、フリードリヒ・ヘルダーリンの小説「ヒュペリオン」中の詩「運命の歌」をテキストにした混声四部合唱曲で、1868年から71年にかけて作曲されました(オリジナルはオーケストラ伴奏による)。全体で17分ほどの曲は、以下のように3つの部分に分けることができます。

第1部は「柔らかない天地の上に光の中を逍遙する汝等精霊達よ!.....安らかに眠る幼児の如く御

身達は運命をこえて息づく」と、天上の喜び、静けさ、清らかさを歌います。第2部は「しかしながらそれに反し我々は安らう場所もなく、なやめる人間共は.....奈落の底へと消えおちてゆくのである」と歌い、第1部の天上の世界に対し、人間の絶望的とも言える苦しみを表現します。第3部はオーケストラのみによる後奏。ヘルダーリンの悲劇的な結びにどうしても同調できずに悩んだブラームスは、オーケストラのみの音楽で天上の清らかさが帰ってくるように構成したのです。

この詩と音楽を畑中良輔氏はどのように解釈するのでしょうか。セミナー当日を楽しみにお待ちください。なお、2月5日(既に終了)と26日には茨城県合唱連盟理事長・鈴木良朝氏の指導による事前講習会があります。皆さん、ふるってご参加いただき、熱い感動の一日を一緒に盛り上げましょう。

《関根》

WOOD MUSIC

3 / 25(土) 加藤訓子とワークショップ参加者によるジョイント・コンサート

水戸芸術館では4年前から親子で楽しめるワークショップを開催しています。このワークショップ、最終日にはアーティストと一緒にステージで演奏をしてしまおう!という、ちょっとドキドキするけれど嬉しい特典付きなのです。

さて今回は、パーカッションの加藤訓子さんをお招きしました!加藤さんは、現在、アメリカを中心に、日本、ヨーロッパ等で演奏活動を行っています。水戸芸術館では、2001年水戸室内管弦楽団ヨーロッパツアーおよび第45回定期演奏会、02年「ちょっとお昼にクラシック1」に出演、様々な音色を巧みな技でつむぎ出し、聴衆に「聴く」だけではなく「見る」楽しみも与えてくれました。マリimbaやドラムだけでなく、なんと植木鉢やドラム缶等も楽器にしてしまう加藤さん。こんな物からそんな音が!?と驚いてしまうほど、繊細で美しく、時に激しい音を創り出し、表現する...その物が持つ音の可能性の限りを引き出すことのできるアーティストだと思えます。

そんな加藤訓子さんによるワークショップ(3/21・24)は、「木」をテーマに、丸太をくりぬいて作った『ログドラム』という楽器を使って行いま

す。どんな音が生れるかはお楽しみ!そして、3/25にはエントランスホールとコンサートホールにて、加藤さんとワークショップ参加者によるジョイント・コンサートを開催します。参加者とのパフォーマンスはもちろん、加藤さんのソロ演奏も存分にお楽しみいただけるこのコンサートは、入場無料。春休みにご家族皆さんで、是非、「木」の音楽を聴きに、足をお運びください。《馬場》

『Roots of marimba 私とマリimbaとの出会い』 加藤訓子

幼いころからピアノを始め、物心ついた中学生のころには自分の手の小ささに限界を感じていました。そんなある日出会ったマリimba。こんな響きがあるのか、と不思議な魅力に取りつかれ、そこからはマリimbaを弾くことに夢中になり、ひたすら曲をこなし、音楽大学への道が開かれました。ところがアカデミックな世界の中でこのマリimbaを見ると、他の完成されたピアノやヴァイオリンに比べ、何かが足りないような、楽器としての限界を感じ始めたのです。

マリimbaにつかず離れずいた時期もあり、その間他の打楽器を通してオーケストラや室内楽、いろいろな世界での活動を続けながら学んだこと、それは「音、楽器のプリミティブさ、そして人間の体を通して音を出すこと」でした。特に今回ご紹介するログドラムは原始の木の生音そのもので、日本で育った様々な種類の木を掘って作られたものです。

実はマリimbaも相当プリミティブな楽器なのです。おそらくアフリカで生まれたものが最初の起源と言われていますが、人類の歴史とともに進化し、民族の移動とともに世界に広がり、発展してきました。最初は両手を広げたほどのひょうたんのぶら下がった卓上木琴のようなものでした。今や2メートル半もある巨大な物体、初めて見る方はよく驚かれますが、この自然の木を並べた鍵盤からは不思議に大地を包み込むような豊かな響きが出ます。自分の意思で好きで始めたマリimba、今またこのマリimbaを弾きたいと思っています。

この3日間で皆さんとこの木のサウンドを通して音楽のルーツ、そしてマリimbaのルーツに触れてみたいと思っています。

写真左から;
兼氏規雄とカルテット・エクセルシオ、
泉 リリコ



SELF

PORTRAIT

モーツァルト生誕250年記念
水戸市在住のクラリネット奏者・兼氏規雄
がお届けする、モーツァルトの室内楽

3 / 11(土) 兼氏規雄 クラリネット室内楽演奏会

共演者について

今年はモーツァルトの生誕250年にあたりま
す。国内でも記念の演奏会や催しが数多く予
定され、モーツァルトやクラシック音楽への関心
が高まりそうです。私も クラリネット五重奏曲
を2月に藤沢・湘南台トワイライトコンサート、3
月は今回の水戸芸術館、5月21日は新・杉並
公会堂オープニングシリーズ、12月19日は東
京文化会館で日本モーツァルト協会演奏会の合
計4回演奏します。

このうち、杉並公会堂を除く3回はカルテッ
ト・エクセルシオとの共演になります。彼らとは

一昨年、私の東京オペラシティでのリサイタルで
初めて共演し、音楽に対する真摯な取り組みと、
優れたアンサンブルに驚かされました。繊細な
表現は天下一品で、日本では最高級の弦楽四
重奏団です。

ピアノの小坂圭太さんは高校、大学を通して
私の2年後輩で昔から良く知っていましたが、共
演となると4年前の日演連クラシックフェスティ
バルが最初です。一昨年、私の水戸芸術館で
のリサイタルでも共演したので、ご記憶の方も
多いのではないかと思います。レガートを極力
大切に、丁寧に歌を作り出すことの出来るピ
アニストです。

新楽器クラリネット

モーツァルトの活躍した18世紀後半、クラリ
ネットはまだ誕生したばかりの極めてモダンな
楽器でした。当時その音を聴くには、ウィーンや
パリ、ミュンヘン、ミラノ、プラハなどの大都市
へ行かなければなりませんでした。豊かな音
色と高い機動性を持つこの新楽器の人気は高

く、モーツァルトも創作意欲を大いに駆り立てら
れました。しかし、25歳まで生活していたザル
ツブルクのオーケストラには、残念ながらクラリ
ネットはまだ用いられていなかったため、この楽
器がモーツァルトの作品に登場するのは、その
後ウィーンに移住してからのこととなります。

ところで弦楽四重奏というジャンルは、先人
ハイドンによって基盤が固められ、モーツァルト
自身も生涯を通じて多数の作品を残している分
野ですが、そのようなあまりにもオーソドックス
なアンサンブルに、「最新」のクラリネットの音
色がこれほど良く調和するとは大変な驚きであ
ったに違いありません。しかも クラリネット五
重奏曲 は、当時としては全く新しい試みだった
にもかかわらず、モーツァルトすべての作品中
でも極めて高い完成度を誇る傑作となったので
す。崇高な美と、明るくどこか悲しみの表
情も兼ね備えており、晩年のモーツァルトの作
品でなくては味わえない魅力を持った珠玉の名
曲を是非お楽しみ下さい。

兼氏規雄

水戸市在住のピアニスト・泉リリコが水
戸芸術館初登場。作曲家フランツ・リスト
の2つの側面に光を当て、その魅力を存
分に引き出します。

3 / 18(土) 泉 リリコ ピアノリサイタル

この度、水戸芸術館でリサイタルを開く幸運
に恵まれ、テーマは「フランツ・リスト ~トランス
クリプション(改編曲)とオリジナル曲」を選び
ました。

私がリストに特別な思い入れを抱いたのは、
18歳の夏、ロサンゼルスでのアール・ヴォルヒ
ーズ教授との出会いがきっかけです。ヴォルヒ
ーズ先生は、ラフマニノフの従兄でリストの愛弟
子であったアレクサンドラ・ジロティに師事され

ました。レッスンでは、「リストがお手本に弾い
たときは、ここの部分は驚くほど軽やかだったら
しい。」とか、「リストはこの音が大事だといつも
言っていたそうだ。」等、リストの生の声が伝わ
ってくるような迫力があり、私は、リストに親近
感を抱き、その音楽の魅力の虜になりました。

リストはピアノのためのオリジナル曲を218曲
書いていますが、「トランスクリプション」と呼ば
れる自身や他の作曲家の歌曲、オペラ、交響
曲などの改編曲は376曲も残しています。「オリ
ジナル曲」には、リストの愛国心や宗教心など
を含む「思想」が反映され、一方、「トランスク
リプション」には、音楽、ピアノ、美しい旋律に
向けられるリストの純粋な愛情や、他の作曲家
への寛大な心、ユーモアのセンスなどリストの
「性格」そのものが表れていると感じます。

今回、特に愛着のある5曲のトランスクリプ
ションを選びました。ニューヨーク留学中、声楽
のダン・マレック教授のスタジオ伴奏者を務め、

いつも歌曲がそばにありました。今回は、特に
大好きな 歌の翼 と 献呈 を。又、リゴレッ
ト・バラフレーズ を弾くたび、メトロポリタン歌
劇場の天井桟敷の学生席で素晴らしいオペラ
に圧倒された時間を思い出します。ペトルルカ
のソネット第104番 は、リストがイタリア旅行
中にペトルルカの詩に感銘を受け、もともと歌曲
として書きましたが、余程気に入っていたのでし
ょう。リスト自身がピアノ曲にアレンジした大変
美しい曲です。民族舞踊・音楽の「タランテラ」
は、私の研究テーマであり、今回は、リストがイ
タリア旅行で出会ったタランテラやカンツォー
ネを使って書いた タランテラ を演奏します。

オリジナル曲として取り上げたのはリストの最
高傑作、ピアノ・ソナタ ロ短調 です。

今回のリサイタルでは、「オリジナル曲」と「ト
ランスクリプション」の両方の魅力を、聴いて頂く
皆様に存分にお伝えしたい、と願っております。

泉 リリコ

最近の公演から

DECEMBER
JANUARY



1



2



3



4



5



6



7



8

庄司紗矢香ヴァイオリン・リサイタル (12月1日)

11月の水戸室内管弦楽団第63回定期演奏会に登場した榎本大進に続き、庄司紗矢香が登場。どちらも技術の高さのみならず、音楽の深奥に迫ろうとする妥協なき姿勢で突出している二人、それぞれの個性をお楽しみいただけたでしょうか。さてシューマン、ショスタコーヴィチ、リヒャルト・シュトラウスという硬派プログラムで臨んだ庄司紗矢香、ひとつひとつのフレーズや音楽構造の意味を強固に把握し、きわめて説得力と訴求力の強い演奏を展開した。特にショスタコーヴィチは、晩年の荒涼とした心象風景のみならず、この曲の構造に凝らされた意匠が浮かび上がる演奏で、強い印象を与えた。ピアノのイタマール・ゴランも強力な個性で、時に彼女の音楽をリードし、ときに丁々発止と掛け合う。白熱した二重奏だった。

さてこの日は、彼女の今年の日本におけるリサイタル・ツアーの最終日にあたったのだが、アンコールが3曲演奏された(シューマン:3つのロマンスから第2番、バルトーク/セーケイ:ルーマニア民俗舞曲、ドヴォルジャーク/クライスラー:スラヴ舞曲 作品72の2)。3曲も演奏してくれたのは、水戸の聴衆のあたたかく熱烈な拍手の力もあったのでは?《矢澤》アンケートから 聴き手を集中させる、素晴らしい演奏でした。特にショスタコーヴィチでは、何かに取りつかれた様子が、彼女の中で何が起きているのかと想像をかきたてられました(水戸市:A.K.さん) 1曲目、彼女の巫女のような初々しさ、2曲目、内面からほとばしる情念、3曲目 ばらの騎士 のようなヴィルトゥオーゾ、ブラボー! アンコールも最高でした(いわき市:T.K.さん) 凄い、凄い、生きている、音が。ショスタコーヴィチの緊張感のある暗い生きた音がおそい、R.シュトラウスの生き生きとした音があふれている(中略)これぞ生演奏のダイゴ味と思う。とつてもすばらしかった。私がさやかさんみたいになるまで11,000年はかかると思います?(Kさん10歳)

アートタワーみとスターライトファンタジー 第10回 クリスマス・コンサート [市内小中学校 芸術館コンサート] (12月3日)

水戸芸術館や水戸駅をライトアップする水戸の冬の風物詩が、アートタワーみとスターライトファンタジー。同イベントの一環として、水戸市内の小・中学生が日頃の音楽活動の成果を披露するのが「クリスマス・コンサート[市内小中学校芸術館コンサート]」です。今年は吹奏楽、金管合奏、合唱、ミュージックベルなど18校、22団体、800人を超える生徒さんが参加しました。大勢のお客さんを前に、少し緊張しながらも一生懸命に演奏をしたこの時間が、子供たちの一生の思い出となりますように。《中村》

佐藤 篤 ピアノ・リサイタル(12月10日)

ピアニストとして、また茨城大学の教授として演奏に教鞭に大活躍中の佐藤 篤氏。水戸芸術館での5回目のリサイタルとなる今回は、氏がライフワークとしている「シリーズ 同時代を生きた作曲家たち」の第4回で、「18世紀ウィーンの夜空に光輝く二種の星」というタイトルのもと、モーツァルトとベートーヴェンを取り上げたプログラム。ただし、「熱烈なファン」の要望を受けて(佐藤氏ライナーノートより)、「ハイドンの小曲が加わり、ウィーン古典派の三巨星が並び立つ壮大なプログラムとなった。前回の水戸芸術館でのリサイタルは20世紀音楽を取り上げ、きわめてスリリングな演奏を聴かせた佐藤氏だったが、今回は古典派の名作群にがっぶり四つで挑み、比類のない氏独自の解釈が際立つ熱狂的な演奏を繰り広げた。アンコールはベートーヴェン:エコセーズ変ホ長調 WoO.86およびショパン:ノクターン 第9番 口長調 作品32の1。《矢澤》アンケートから 佐藤篤さんは東京でも活躍している、茨城では貴重な演奏家です。このような方にこのホールでの演奏の機会がもっとあるべきだと思います(無記名の方) ピアノ演奏ならではの快感を得ることができとてもよかったです。(中略)佐藤さんのように毎年水戸でリサイタルを開催しうる演奏家には毎年のように演奏機会を保障していただきたいものです(水戸市:T.T.さん) ハイレベルの演奏技術を要する曲を聴かせて頂き感動しました(無記名の方) 毎年水戸でリサイタルを開催する能力のある彼のような演奏家に水戸芸術館で演奏するチャンスを与えてほしい(ひたちなか市:無記名の方)

水戸の街に響け! 300人の《第九》 (12/18)

今回で5回目を数えた「水戸の街に響け! 300人の《第九》」(茨城県合唱連盟、水戸市合唱連盟、水戸市音楽団体連盟との共催)。今年も沢山のの方々からお申し込みいただき、365名の大合唱となりました。鈴木良朝氏(指揮)をはじめとする指導のもと、9月より練習を重ねて本番にのぞきました。

本番当日はかなりの冷え込みで風も強く、最高気温も4という《第九》始まって以来1番の寒さ。この寒さの中「きちんと演奏できるのだろうか」というスタッフの心配は他所に、合唱団は練習の成果を存分に発揮し、最高の歌声を響かせてくれました。そして器楽奏者(小林由佳、蛭田優子、中村真由美、中村佳代、尾花章子)と独唱者(結城滋子、山本彩子、小貫貴夫、清水良一)の熱演がそれらを力強く支えていました。何より嬉しかったのは、寒さの中足をお運びいただき、最後までお聴きくださったお客様が本当に沢山いらっしゃったこと。まさに、「歓喜に満ちた調べに ともに声を合わせよう」という今回のテーマが実現した瞬間だ

最近の公演から

DECEMBER
JANUARY



1



2



3



4



5



6



7



8

ったのではないのでしょうか。

《第九》は来年度も開催する予定。今後も多くの皆様とともに、ますます盛り上げていきたいと思えます。《馬場》

クリスマス・プレゼント・コンサート2005

(12月23日)

全7ステージでお贈りした今回のクリスマス・コンサート。天空より私たちの命を見つめる温かなまなざしが注がれているかのような、幸せな一夜となりました。ソプラノ歌手・中澤桂さんは、深い叙情をたたえた日本歌曲の数々を披露してくれました。ピアニスト・遠藤郁子さんは、どこまでも透明で神秘的ヴェールを纏ったショパン作品を演奏してくれました。そして、リハーサルの時に「もう、これ以上やったら倒れちゃうよ」と言いながらも、演奏会ではアンコールまで応えてくださったのは、90歳のチェリスト・青木十良さんです。さらに、茨城ゆかりの演奏家も登場するのが、このコンサートの魅力のひとつ。詩人・金子みすゞの無垢な童謡の世界を美しく歌い上げた野ばら会。野ばら会とともにクリスマス・メドレーの大合唱を行ったカラコレス女声合唱団。どちらも中澤敏子さんの指揮の下、入念なリハーサルを積んで演奏会に臨んでくださいました。ピアニストの中村佳代さんのメシアン作品の演奏は、もはやこのコンサートには欠かすことので

きない存在です。終演後は、恒例のエントランスホールでのクリスマス・キャロルの大合唱、オルガン伴奏は吉村怜子さん。このコンサートの企画・進行役はお馴染みの畑中良輔氏。《中村》アンケートから 中澤桂さんの日本語の表現力(魂がある、ことばの力)に感動しました。(水戸市:N.K.さん) とても素晴らしかったです。中でも青木さんの「90歳のチェロ」は、とても優しくて……はじめから最後まで感動で涙がとまりませんでした。やさしい心になれました。(無記名の方) 遠藤先生のピアノにすごく感動しました。このコンサートのすべてが、私にとって感動するものでした。(水戸市内の高校生)

ニュー・イヤー・コンサート2006

“Stars Play Stars”(1月5日)

今年のニュー・イヤー・コンサートは「星」がテーマ! 芸術館が誇る「スター」たちが「星」の音楽を奏でる一夜、お楽しみいただけましたでしょうか。とにかく今回は完売御礼が早く、このコンサートへの皆さんの期待の大きさを嬉しく思いました。ゲストの森 麻季が熱唱したヘンデル、多彩なソリストたちの共演、そして最後には野平多美編曲のホルスト: 木星 が堀 伝指揮のもと華麗なサウンドでホールをいっぱい満たす。そして熱をほどよく冷まます。杉浦圭子アナの落ち着いた司会。毎年盛りだくさんすぎてすみません。皆さんの今年1年が、

天空にまたたく星のように美しく夢に満ちたものでありますよう! ちなみにこのコンサート、NHKの県域デジタル放送で生中継されました。なお曲目は「プチ情報」をご覧ください。《矢澤》アンケートから 日本各地で「ニュー・イヤー・コンサート」がありますが、水戸のそれは企画・内容・出演者、どれをとっても“ナンバーワン”ではないのでしょうか。とても誇らしいです。今後も期待しています(水戸市:S.E.さん) 昨年も魅了させていただいたMakiさんの声はほんとに感激です! 来年もぜひ来たいと思わせる内容に大満足の夜でした。特に今回は嫁いだ娘と一緒に親子4人で聞けたので、なお記憶に残る一夜となりました(新潟県佐渡市:M.B.さん) 昨晚BSで森さんのすばらしい歌声を堪能しました。今日ニュー・イヤー・コンサートで生の声を聞かせていただき感謝です。杉浦圭子さんの司会も楽しみにして今日を待ちました(栃木県鹿沼市:T.F.さん) いつもながらバラエティに富んだ内容ですごく良かったです。今回は初めて耳にする作曲家も多く気持ちもワクワク、又、スペシャルバージョン(註: 木星 の編曲など)での演奏も水戸芸術館ならではの今年もやってくれたと思いました(水戸市:Y.M.さん)

茂木立真紀ヴァイオリン・リサイタル

(1月21日)

水戸市在住の茂木立真紀さんによるリサイタルは、ベートーヴェンのソナタ第8番、バッハのシャコンヌ、クライスラーの小曲3曲、ブラームスのソナタ第3番という、意欲的でヴァリエティ豊かなプログラム(ピアノは手塚充代さん) かつて「ロータス弦楽四重奏団」のメンバーとして、CDをインターナショナル・リリースしている茂木立さんは注目度も高く、東京から音楽評論家の方がいらっしやるほど。見せ掛けの派手さとは無縁の、中身の詰まった充実した演奏で、聴衆を深く魅了した。こうしたフレッシュな音楽家の活躍が、ますます茨城の音楽シーンを活気づけてゆかず。水戸芸術館は、これからもいっそうがんばって、そんな方々を応援してゆきたいと思えます! 《矢澤》アンケートから 素晴らしい音楽に感動、御かつやくを祈る(日上市:K.さん) 技巧だけでなく、内容で聴かせる曲目で充実していた。茂木立さんのヴァイオリンの音色も、しっとり温かく良かった。実力のある人だと感じた(水戸市:無記名の方) 感情の表現がよく表れていて感動しました(東京都:K.K.さん)

本日のBachは、私の思い出の曲です。(中略) その頃に感じたBachのもつ世界(はてしない宇宙をすべてとらえるような広さと深さ)を思い出すことになりました。少しばかり涙腺がゆるみました(Kさん)



* nettama=ネットワークする猫、タマ。
芸術館のコンサートをサカナに
いろんなところへnettamaします。

北ドイツ・オルガン音楽へのお誘い

偉大な人間は、どれほど非の打ち所のない業績を残しても、かならずその大きさをゆえに「影」の部分を作ってしまう。その「影」に、負けず劣らず功績を残した人々が少なからず隠される。もっともこれは本人のせいというより周囲や後の世代が彼の存在をどんどん大きくしてしまうことにむしろ責があるのだが。

音楽史でいったら、さしずめその最たる存在がヨハン・ゼバスティアン・バッハだろう。昔の音楽の入門書などによく書かれていたニックネームは「音楽の父」。さすがに、「クラシック音楽」じゃないんだよ、「音楽」の父だよ。あらゆる音楽がバッハという父から泉のごとく湧き出したかのよう。

今は、少しでも音楽史の本をひもとけば、バッハはむしろそれまでの先輩作曲家たちの音楽を集成した存在であることがわかるけど、一般に染みついた印象はなかなか消えにくく、バッハより前のドイツ音楽を集めたCDに「バッハ以前の(音楽)」というタイトルをつけたものがわりと最近まで散見された。それに、いろんな音楽家をバッハとの関係性で表現することはいまでも多い。「若きバッハに影響を与えた」とか「のバッハ」と言うべき深遠な音楽」といった具合に。自分を含めて、気をつけたいところだ。バッハ一点主義で、周囲の他の作曲家の価値や魅力を、見逃してしまうかもしれないのだから。オルガン音楽には、特にそうした傾向

が顕著だろう。でもこれまで芸術館で行われてきたオルガンのプロムナード・コンサートやリサイタルをお聴きになられた方ならもちろんご存知だとは思いますが、バッハ以外にもすばらしいオルガン音楽は数限りなくある!それこそ、一生かかっても聴ききれないくらいに。

さて、水戸芸術館では3月20日にヴォルフガング・ツェラーのオルガン・リサイタルを実施する。内容についてはNさんの紹介記事をぜひご覧いただきたいと思うが、そこで紹介される「北ドイツ・オルガン楽派」こそ、まさしく「バッハ以前のオルガン音楽」と呼ばれてきたジャンルであり、同時に、そんな言葉で片付けることなどとうていできない名曲の宝庫なんだ。「北ドイツ・オルガン楽派」のなんたるかについてはNさんの解説に詳しいので、僕はほんのおまけ程度に、北ドイツ・オルガン楽派を楽しむためのおすすめCDをご紹介します。

まず、オランダ人だけど、ドイツ人のすぐれた弟子を何人も輩出し、「ドイツ・オルガン音楽の父」(ここでも「父」だ)と呼ばれるスウェーリンクは避けられない。この巨人のオルガン音楽は、霧の中にそびえたつ教会の尖塔のようで、なんとも神秘的だ。半音階的ファンタジアとか、わが若き命まさに果てなとすとかほんとうにすばらしい。ヘーリック(ハイペリオン 輸入盤)かウーリー(シャンドス 輸入盤)あたりの選集が入しやすい。

彼につづく世代のドイツ音楽家たちのCDは

今や輸入盤ショップに行けば山のようにあるが、ここではシャイデマン、シルト、ブルーンズ、ベームの作品がまとめて聴ける便利なレオンハルト盤(ソニークラシカルSRCR1563)を挙げておこう。どれも北ドイツの厳しい冬と、その寒さゆえに感じられる暖炉の火のような暖かさが感じられる逸品ぞろい。ブルーンズのプレリウド・ホ短調の大胆な和声には驚く。ニュー・イヤー・コンサートで「暁の星は美しきかな」が演奏されたブクステフーデの豪放で力強い音楽は、コープマン盤を(ノヴァリス 輸入盤)、ヴェックマンはツェラーが2枚の選集を出している(ナクソス 輸入盤)。さらにツェラーは、ベームとブクステフーデという2人の先輩から影響を受けたバッハの作品集、という興味深いアンソロジーも出している(ヘンスラー 輸入盤)。「バッハがいかにして生まれたか」を知るには好適な内容だ。

ツェラー plays バッハ
effected by ベーム & ブクステフーデ
(ヘンスラー CD92 088)



プチ情報 速達

1月5日に行われた「ニュー・イヤー・コンサート 2006 “Stars Play Stars”」の曲目をご紹介します。ヨゼフ・シュトラウス(野平多美編曲、野平一郎監修):フルツ 天体の音楽(室内アンサンブル版 *水戸芸術館委嘱・世界初演)指揮:堀 伝、コンサートマスター:沼田園子) / モーツァルト: “ああ、お母さん、あなたに申しませう”による12の変奏曲 K.265(300e) / きらきら星変奏曲(ピアノ:野平一郎) / ボンセ:エストレリータ(星)(ヴァイオリン:小林美恵) / ヴィエニャフスキ(ヴィークマン補筆完成):夢(ヴィオラ:店村真積) / サルゼード:夜の歌(ハープ:吉野直子) / ホイベルガー(クライスラー編曲):真夜中の鐘(ヴァイオリン:久保田 巧) / ヘンデル:カンタータ ではやはり真となるのか(死に瀕したアグリッピーナ) / ソプラノ:森 麻季) / ヴィヴァルディ:協奏曲集 作品3 調和の靈感 から 第8番 イ短調 RV522

(ヴァイオリン・ソロ:久保陽子、中村静香) / ビーバー:ロザリオのソナタ からバッサリア(ヴァイオリン:加藤知子) / ブクステフーデ:コラール 暁の星はいと麗しきかな BuxWV.223(オルガン:高橋博子) / ハーリン(島津秀雄編曲):星に願いを(フルート:渡邊玲奈) / カーマイケル(野平多美編曲、野平一郎監修):スターダスト *水戸芸術館委嘱・世界初演(低弦アンサンブル) / モーツァルト:証聖者の盛儀晩課(ヴェスベレ) K.339から “ラウダー・テ・ドミヌム”、フォーレ:レクイエム 作品48から “ピエ・イエズ”(ソプラノ:森 麻季) / ホルスト(野平多美編曲、野平一郎監修):惑星から 木星(室内アンサンブル版 *水戸芸術館委嘱・世界初演)指揮:堀 伝、コンサートマスター:田中直子) ちなみに、「大吉リクエスト」でもっとも人気を集めた曲は 星に願いを をした。

